

論文内容の要約

論文名	ソーシャルワークの専門職化の過程に関する研究 —ソーシャルワーク理論とグローバル定義にみる知の変容— (A Study of the Professionalization of Social Work: Transformation of Knowledge in Social Work Theories and Global Definition of Social Work)
氏名	三島 亜紀子
<p>本論文の第一の目的は、従来のソーシャルワークの知の設定のされ方を明らかにするために、ソーシャルワーカーの専門職化がどのように進められてきたのか、萌芽期の専門職観を明確化したうえで、理論的体系化の歴史的変遷を明らかにし、その後の反専門職主義の高まりを受けたソーシャルワーク理論の変化の過程を明らかにすることである。ポストモダニズムに属するソーシャルワークの手法（モデルや視点）およびエビデンス・ベイスト・ソーシャルワークの貢献と意義をつまびらかにすることは、今後の社会福祉実践と専門職養成、一般向けの福祉教育に寄与する。特にポストモダン的な視点（本稿で言う反省的学問理論の観点）は、現今の社会正義や多様性尊重といった原則や、中核になる任務（社会変革・社会開発・社会的結束・エンパワメント）、ソーシャルワークの倫理の深い理解につながることから重要となる。第2の目的は、国内外の事情を鑑みつつ、2014年に採択された「ソーシャルワークのグローバル定義」の検討を通じて、現在のソーシャルワーカー像を明らかにすることは、今後のソーシャルワーカーが踏まえるべき基礎を示すことになる。</p> <p>この論文の結論として、次の点が指摘できる。第1に、ソーシャルワーカーは「片手に反省的学問（ポストモダン的）理論、片手にエビデンスに基づく権限を手にした専門家」と指摘したように、実践では基本的に非対称性を廃しポストモダン的な思想に基づくものの、リスクに直結する、あるいは予想できる場合などには、ポストモダン的な実践モデルが保留される場合がある。いずれの場面においても、エビデンスの存在が大きくなっているが、これを批判的にみる視点も不可欠である。第2に、今やソーシャルワークの知は、宗教や風習など利用者の側の知を含むものとしてソーシャルワークのグローバル定義にも示されている。こうした局面における実践では、ワーカーの持つ専門知と地域・民族固有の知の間、原理や価値観の間に軋轢が生じることが予想できる。そこで今後、ますますソーシャルワークの倫理や価値の存在がソーシャルワークの実践や教育の中で重要なものとなっていくといえる。</p>	